様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４６３

研究課題名（和文）ダイクシス，アナファーに基づくテクストの構成原理についての機能類型論的研究

研究課題名（英文）Functional-typological studies on the text construction principles based on the concept of dexis and anaphor

研究代表者
田中　愼（Tanaka, Shin）

千葉大学・普遍教育センター・教授

研究者番号：５０２３６５９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，テクスト構造と文構造の形成する共通の原理としてのダイクシス，アナファーについて研究を行った。談話状況からの直接アクセスに基づくダイクシスは，「直接経験」の言語化，テクストという場で一度概念化を経た情報処理の仕組みであるアナファーは，貯蔵された「知識」の反映であるという仮説にもとづき，ドイツ語，日本語における文法，テクスト構成の記述を行った。また，タイ語や英語などの言語についてもミュンヘン大学の研究グループと国際共同研究を行い考察を進めた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we were engaged in analyzing the concept of "deixis" and "anaphor", which could be understood as an encoding strategy from the discourse situation (deixis) and as a process dealing with conceptualized knowledge (anaphor) respectively. On the hypothesis that the grammar and the text organization are based on these two strategies, we tried to describe Japanese and German grammar and text organization with these concepts. Besides, we collaborated with Thai and English researchers at LMU Munich and tried to examine the validity of our hypothesis.

研究分野：ドイツ語言語学

キーワード：言語学　ドイツ語学　テクスト言語学　ダイクシス　機能類型論

１．研究開始当初の背景

文構造や句構造，そしてテクスト構造を貫く普遍的，個別言語性を記述する試みの一環として，Tanaka（2011）は,「テクスト内における二つの指示のストラテジー（ダイクシス，アナファー）が言語によって異なる分布を示し，それがテクスト構造および文法全体に影響を及ぼす」というテーゼを提示した。このテーゼを背景に本研究は, .ドイツ語内部におけるこれらの原理の実現形式と諸言語（おもに日本語）のそれを比較対照を行った。その際，海外の研究者と連携して検証を進めた。本研究のための準備として，2011 年の夏にミュンヘン大学で行われたサマーアカデミー＆ワークショップ，2012 年夏に同大学で行われた日独研究会議において集中的な議論がなされるなど，着実に行われていたが，本計画研究は，この日独共同研究の枠組みを拡大し，推し進めることになった。

２．研究の目的

本研究は，言語における文構造およびテクスト構造における言語普遍的基本原理とそこから導かれる個別言語的な特徴を記述することを目的として行われた。その際の中心的な概念は，ダイクシスとアナファーという言語横断的に見られる指示ストラテジーであった。これをもとに，日本語，ドイツ語の対照を基軸として，タイ語，中国語などのアジア言語，英語，フランス語などのヨーロッパ言語のテクスト構成についての機能類型論的な研究を目指した。

３．研究の方法

本研究は，言語普遍的に見られる指示のタイプ（ダイクシス，アナファー）に基づいて，文法構造およびテクスト構造の個別性，普遍性を記述することを目指すものであった。その際，

a.　テクスト構造の共時的対照言語的研究（日独タイ語）

b.　テクスト構造の通時的変遷に関する研究（ドイツ語）

という二つの軸を設定し，各言語の文法およびテクストの構成において働くダイクシスおよびアナファーの原理を明らかにし，個別性を解明するとともに，それらに共通する普遍性を導出することを目指した。

４．研究成果

（1）概念の明確な規定と拡大

研究の最初の段階で，ダイクシスとアナファーというテクスト概念の再検討を行った。談話状況からの直接の言語活動のプロセスとしてのダイクシスとすでに先行する言語活動の記憶に基づくアナファーという概念を，それぞれ「直接経験」および「貯蔵された知識」を反映する言語活動と捉えることにより，文法記述およびテクスト構成の記述においてより一般的な道具立てを得ることとなった。

（２）「経験」と「知識」に基づく文法カテゴリーの分析

上記でより幅広い概念として規定しなおしたテクスト構成の概念が文法構造にも強く反映されていることについて詳細な分析を進めた。対象となった文法構造の主なものは，以下の通りである。

a. 格の体系（構造格と語彙格）
（Tanaka 2015a, Tanaka 2015c で公刊）

c.　主語―述語構造とトピック構造
（Tanaka2013a, Tanaka 2014 で公刊）

c. コプラ動詞の体系

d. 過去形消失（Präteritum- schwund）の機能的研究　（公刊準備中）

e. 完了形の助動詞選択の問題（公刊準備中）

（３）テクスト構成の研究

（２）で研究を進めた文法カテゴリーについてそれぞれ，そのテクスト上での使用（テク

ストのレジスター，さまざまな話法，テクスト展開における役割，通時的な展開）などについての分析を行った。しかしながら，（２）の研究が予想以上に幅広い範囲に及んだことから，テクスト構成の研究は現在も継続中の課題となっている。

（４）教育的応用と成果発表

これらの研究成果について，ミュンヘン大学のライス教授を中心とする研究グループと日独で研究集会を展開したが，その一つの教育的な応用として，2015 年の夏にミュンヘン大学のサマーコースの枠組みで日独を中心とした各国から若手研究者が集った国際言語学サマーコースを実施した。このコースで，研究代表者は，ミュンヘン大学のドイツ語，タイ語，中国語，イタリア語などの研究者とともに講師をつとめ共同研究の成果を公開した。本コースおよび関連の諸学会における研究発表の成果を論集の形で公刊すべく，現在のところ編集作業を行っている。

また，海外連携研究者であるライス教授の著書であり，本研究の成果とも密接に関係している研究である，「Spachphilosophie」を現在，国内の研究者とともに翻訳を進めているが，これについても 28 年度内の公刊を目指している。

引用文献

① Shin TANAKA (2015a): Kasusalternation und Perspektivenwechsel im deutsch-japanischen Kontrast. in: *Linguistische Berichte Sonderheft 20*. Helmut Buske. 97-109.

② Shin TANAKA (2015c): Kasus und Raumwahrnehmung im Sprachvergleich. in: Ogawa, A. / Miyashita, H. (Hg.). Raumerfassung im deutsch-japanischen Vergleich. Tübingen. Gunter Narr.

③ Shin TANAKA (2013a): Kombinatorik zweier Personensyteme: Zur Universalität der „Unpersönlichkeit“. in: Tagungsband der IVG-Tagung 2010 Warschau. Warschau. 197-202.

④ Shin TANAKA (2014): V2-Puzzle: Funktionale Beschreibung aus „japanischer“ Sicht. in: Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.). Tagungsband des 40. Linguisten-Seminars der JGG. München: iudicium. 90-104.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Shin TANAKA (2015): Kasus- alternation und Perspektivenwechsel im deutsch-japanischen Kontrast. in: *Linguistische Berichte Sonderheft 20*. Helmut Buske. 97-109. 査読有

② Shin TANAKA (2014): V2-Puzzle: Funktionale Beschreibung aus „japanischer“ Sicht. in: Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.). Tagungsband des 40. Linguisten- Seminars der JGG. München: iudicium. 90-104. 査読有

③ Shin TANAKA (2013): Deixis in der Grammatik: Sprache als Kommuni- kations- und Wahrnehmungsmittel. in: Sophia European Studies Series: Vol.6. The use of language in everyday life – European Languages. 157-178. 査読有

〔学会発表〕（計 14 件）

① Shin TANAKA, „Grammatik“ aufgrund Erfahrung und Wissen: grammatische vs. lexikalische Kasus. bei: 2. Deutsch-japanisches Lingui- stisches Kolloquium. （2015 年 8 月 22 日）. München: LMU München. ドイツ. 招待講演

② Shin TANAKA, Sprachtypologie: Varianz und Invarianz in Sprachen. Einführung. bei: Munich International Summer University 2015. （2015 年 8 月 18 日）. München: LMU München. **ドイツ. 招待講演**

③ Shin TANAKA, „Finitheit im Japanischen: Verallgemeinerung des Finitheitsbegriffs“ bei: 2. Deutsch-Japanischer Rundtisch „Japanese-German contrastive studies on the interaction between structure and function - main focus on modality“. Februar 2014. （2015 年 2 月 13 日）. LMU München. **ドイツ. 招待講演**

〔図書〕（計 7 件）

① Shin TANAKA (2015): Kasus und Raumwahrnehmung im Sprachvergleich. in: Ogawa, A. / Miyashita, H. (Hg.). Raumerfassung im deutsch-japanischen Vergleich. Tübingen. Gunter Narr. （2016 **年10月刊行予定，ページ数未定）共著**

② Shin TANAKA (2015): Prädikation im deutsch-japanischen Vergleich. Verb-zweitstellung (V2) und die Partikel –*wa*. in: Ogawa, A. (Hg.) Wie gleich ist, was man ver*gleich*t. 273-282. Tübingen: Stauffenburg. **（2016年5月刊行予定）共著**

③ **田中　愼（編著）** (2014): Linguistische Sprachphilosophie. **日本独文学会研究叢書**. 104. （Einleitung (1-7 **頁)および二論文の翻訳を担当）共著.**

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
田中　愼（TANAKA, Shin）
千葉大学・国際教養学部・教授
研究者番号：50236593

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：